



日本の酪農乳業を築き上げた フロントランナーたち

和仁 皓明 氏（西日本食文化研究会 主宰）

日本の酪農乳業の黎明期を切り拓いた最初の“フロントランナー”は、明治維新で職を失った旧旗本たちだった。彼らは米国から新たに導入された酪農乳業に参画し、自身の屋敷地などで牛を飼い、牛乳を販売するビジネスを始めた。

旧幕臣で明治政府にも仕えた榎本武揚は、旗本の子弟による酪農や農業技術の習得を支援し、現在の千代田区に「北辰社」という牧場を設立している。当時の“牛乳番付”では、榎本の牧場の牛乳は東の大関とされており、高い品質を誇っていた。



明治17年1月の牛乳番付

こうした人々の活動で市乳が普及していく一方で、国内では練乳製造も盛んになった。両者はやがて、有力な乳業会社によって統合再編される。この過程で大きな役割を果たしたのが松崎半三郎（森永乳業初代社長）である。彼は乳業界の再編を単純な企業合併とは捉えず、酪農家たちの共同意識の醸成を重視した。組合のない時代に、酪農家の横のつながりに着目したという点で先覚的な取り組みだったと言える。

現在まで続く北海道酪農の基盤づくりにおいては、明治政府系の人材が活躍した。米国から技術指導者として訪日したエドウィン・ダンの下、北海道

開拓使次官の黒田清隆（のちの第2代内閣総理大臣）、七飯勸業試験場長に就任した湯地定基、日本農学研究の祖とされる岩山敬義らが、北海道の気候風土に適した酪農のあり方を模索していく。

ダンの下で酪農を学んだ人物のひとりに、町村金弥がいる。彼の長男の町村敬貴は、札幌農学校（のちの北海道大学）卒業後に米国の牧場で酪農技術を習得。帰国後にはホルスタイン種の



町村敬貴氏

買い付けを手がけ、乳牛の改良に貢献した。現在日本で飼育されているホルスタイン種の約3分の2が、敬貴が関わった種牛の子孫とされているほどである。

町村金弥の下にいた宇都宮仙太郎も、渡米して酪農を学んだ。帰国した宇都宮は、ダンが導入した米国型の粗放酪農より、50ha当たり50頭程度の搾乳牛を飼うデンマーク農法が北海道には適していると考えた。宇都宮の提言を受け、現地から酪農家を招いて北海道に住んでもらい、長期の技術研修が行われた。彼らの残した教えこそ、今も北海道の酪農家に受け継がれている「牛作りは草作り、草作りは土作り」の考え方である。

明治期から戦後、そして現代にいたるまで、日本の酪農乳業界には多くのフロントランナーたちがいる。彼らの考え方や取り組みを知ることは、酪農乳業のこれからを考える際のヒントになるのではないだろうか。